
きゅありあす

緋冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きゅありあす

【Nコード】

N5706A

【作者名】

緋牙

【あらすじ】

OLだったアニスがハンターのジャンとの出会いによりハンターになり、様々な依頼をこなしていく未来的な感じのお話です。

プロローグ（前書き）

4 話分をひとつにまとめました。

プロローグ

アニスは本日バーで7杯目のカシスオレンジを飲んでいた。

「まったく…やってらんないわよ」

彼女の気合いを入れてセットしたはずの赤毛の髪は乱れ、透け感のある黒いロングドレスの裾は大きく裂けて際どいところまで見えてしまいそうな程だった。

「お客さん、どうしたんですか？」

グラスの水気を丁寧に拭きながら、白髪交じりの初老のマスターが聞いた。

「今日は私の誕生日だったのよ。それなのに、彼ったら借金の返済日に振込むはずだったお金を全部カジノに注ぎ込んで…」

アニスはここまで言うのと泣きじゃくり始めた。

「うつ、うつ、うつ、待ち合わせ場所で待ってたら、うつ、借金取りと一緒に彼が来たの。彼ね、お金が払えないからって私を売るうとしたのよ…」

マスターはアニスの飲んでいたカシスオレンジのグラスをそつと下げた。

「だから、彼と別れたの。もちろん、借金取りに捕まりそうになっただけ、抵抗して逃げて、ここでカシスオレンジなんて飲んでるわけ」

アニスは自嘲するように笑うと、涙をそつと拭った。

「お客さん、よく逃げられましたね？普通男だって抵抗して逃げられるような相手じゃないですよ？」

「そおね。でも私、昔護身術になればと思ってキックボクシングかじってたから。マスター、カシスオレンジもう一杯！」

アニスがカシスオレンジをマスターに注文すると、マスターは首を横に振った。

「お客さん、開店前で買い出しにもまだ行っていないから、さっきの

でカシスオレンジの材料無くなっちゃいましたよ。他のなら作れますがどうしますか？」

「あつ…ごめんなさい。まだ開店前だったのよね？それじゃあ、お水いただける？」

酔い覚ましの水を注文すると、マスターは氷の入った水のグラスをアニスの前に置いた。アニスはゆつくりと水を飲み干すと、左隣の椅子に置いてあったアクセサリーポーチから財布を取り出し、十数枚の紙幣をカウンターに置いた。

「これで足りるかしら？」

マスターはその紙幣の中から3枚だけ受け取った。

「冗談でしょ？カシスオレンジって1杯そんなに安いのか？」

アニスは戸惑った様子でマスターに聞くと、マスターは目を細めた。「今日はお客さんの誕生日なのでしょう？だから、今日は一杯分のお代しかいたたきません」

「それじゃあ、マスター商売にならないんじゃない？」

「ふふつ、お客さんは常連ですからね。これぐらいのサービスして当然ですよ？」

マスターは悪戯っぽく言うとアニスは少し笑った。

「ありがとう、マスター。化粧室借りたらすぐ店から出るわね？」

アニスは椅子から立ち上がり、化粧室のある方向に歩いて行く。

「今日は開店前からお客さんがよく来る日ですねえ」

マスターは店の入り口を横目に棚からグラスを二つ用意した。それとほぼ同時に店の入り口のドアが開く。

「いやあゝいきなり雨が降るなんて思わなかったぜ」

「ジャンさんが知らなかっただけね」

店に二つの影が転がり込んできた。一人は体格の良い中年の男で、迷彩服に身を包んでいる。もう一人は男とは対照的な華奢な体の少女で、こちらは迷彩ではなく白とピンクを基調としたチャイナドレスを着込み、頭には猫耳が生えていてあきらかに人間ではなかった。「だいたいなあゝ雨降るの知ってたら傘ぐらい用意しとくのが普通

「だろ!？」

「またリンにジャンさんの普通押しつけるう。それとても良くないことよ」

少女は少し怒りながらカウンター席に着く。

「おまえなあ、もうガキじゃねえんだからよあ」ジャンと呼ばれた男は少女に半分あきれた口調で言いながら、彼女の隣の席に座った。

「マスター、いつものアルコール」

少女は男の言葉など聞こえなかったかのように初老のマスターに注文する。

「相変わらずですねえ」

マスターはグラスをふたりの前に置きながら、嬉しそうに言った。

「ああ、相変わらずだよ…」

ジャンはマスターの出したウイスキーを一口含み、静かに言った。

「店にしばらく顔出さないから心配しましたよ」

「ウソつけえ。俺の噂ぐらい聞いてるだろ」

「???」

マスターとジャンのやりとりを見ていたリンはひとりきよんとしていた。

「ふふっ、どうだかねえ。それより開店時間ぐらい、いい加減に覚えてくれんかね？」

マスターは水滴を拭き取ったグラスを棚に並べながら忙しげに言った。

「悪いね、マスター。俺営業時間に顔出せないんだわ」

ジャンはグラスを傾けながら寂しげに言った。

「ジャンさんが暴れなきゃ良い話ね」

「おい、リン!俺のこのシリアスチックな雰囲気全台無しにしゃがったな!」

ジャンは額に青筋をたてていたが、リンはそんなことお構いなしでおいしそうにカクテルを飲んでいる。

「ああ…はいはいわかりましたよ！俺が暴れなきゃいいんだろ！」
ジャンはさらに青筋がたっていたが、また何か言えば彼女は鋭い爪でひっかくことを知っていたのであえて引いた。

「マスター、あたしも行くわね。今日はごちそうさま」
音も無くアニスがジャンの後ろに現われた。

『うわぁっ！！』

ジャンとリンは同時に驚くと、アニスにはこりと笑った。

「マスターも大変ね」

アニスはそれだけ言うのと店の出入口に向かって歩きだしたが、それをマスターが呼び止めた。

「お客さん、外は雨ですよ？」

「今日はとことんついてないみたいね」

アニスはアクセサリーポーチを開けて、小さく折り畳まれたショールを取出し、それを頭にかぶった。

「おいおい、そのべっぴんさんよぉ。あんたそんなもんかぶったってずぶ濡れになっちまうぜ？」

ジャンがアニスにさういうと、アニスは肩を抱いてつぶやいた。

「あたしは一秒でも早く家に帰りたいの…」

アニスは店のドアを開け、ショールが落ちないように余った布をクロスさせて肩にかけ、逃げるように雨の中へ飛び込んだ。ドアが閉まる最後の瞬間までジャンはアニスを睨みつけていたとも知らず…。

アニスは雨の中をひたすら走った。

足は靴擦れで血が滲み、ドレスは雨に濡れるほど彼女の体にまとわりつく。

「（早く…早く…もっと早く…）」

店を出てからどれくらい経ったのだろうか。雨音が感覚を鈍らせる。

「（後もう少し…もう少ししょ…）」

突然アニスの足が止まった。そこには時代に取り残されたような古

めかしい煉瓦造りのアパートが建っていた。

「やっと着いた…」

濡れた体を引きずってアパートの玄関ドアを開け、エレベーターホールまで歩く。エレベーターのボタンを押して、降りてくるのを静かに待つアニス。しばらくすると小さなベルの鳴る音と同時にエレベーターのドアが開いた。

「ふう…」

エレベーターの中に入り、床に置かれた大きなレバーをぐいと左に傾けると、ドアが閉まって上昇した。アニスの住むアパートはオーナーのこだわりで溢れていて、全体的にアンティーク感がある。エレベーターのレバーはオーダーメイドらしく、アパートの住人は壊れないように力の加減に注意しなければならない。

エレベーターがアニスの部屋の階で停まって、ドアが開く。

アニスの足は軽やかにエレベーターから部屋へ向かった。

「えーっとカードキーは…」

アクセサリーポーチに手を通り込んでカードキーを見つけると、それをドアに備え付けられた機械に通す。これもオーナーのこだわりなのだが、カードの表面のコードを読み取る形式になっていて、機械を通すたびにコードの形が変わる。そのためセキュリティはばっちりなのだが、やはりエレベーターのレバー同様にオーダーメイドなのだ。

ドアが開くとアニスの表情も明るくなっていた。部屋の中に入ると靴をその辺に脱ぎ捨て、アクセサリーポーチもリビングのソファに放り投げ、濡れて体に張り付いたドレスはショールと一緒に乾燥機に突っ込み、それから彼女はバスルームでシャワーを浴びた。

「あの人達大丈夫かしら？」

アニスの過去の経験から言えばまず悲惨な出来事に巻き込まれるのは確かだった。だが、どこかあの二人は大丈夫なような気がしていた。それどころか自分の呪いめいたジンクスすらも消し去ってくれ

るような気がした。

バスルームから出るとリビングの大きな窓から外を眺めた。外からは街のネオンが見えた。無機質な街。それから、空を自在に駆け巡るさまざまな形の乗り物。

ここはサイバーシティ。この星で唯一の超巨大都市。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5706a/>

きゅありあす

2011年1月15日15時00分発行